悠堕学園

月火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
悠堕学園

【Ｎコード】
Ｎ２６２６Ｊ

【作者名】
月火

【あらすじ】
世間一般に変人だと言われる人専門の学校、という悠堕学園。
主人公・真冬は真人間なのにそこへ入学させられて…。

プロローグ

私の名前は斉藤真冬（さいとうまふゆ）。
１６歳の、高校一年生だ。といっても、ちゃんとした高校には通っていない。
どう言えば良いのか、私にはよくわからない。まだ一年の、それも転入生の私には。

これから始まるのは、そんな学園に通い、過ごす私たちの日々のお話。

――始まりは、今から3ヶ月程前の事。――

9月1日。
『悠堕学園（ゆうだがくえん）。
世間一般に変人だと言われる人専門の学校。常識を超える天才から、ただの変わった人まで、多種多様の生徒、大歓迎。ただし周りに危険行為を働かない人に限る。
ただしここはそんな人を矯正して真人間に直そうという施設ではありません――』

ふざけてる。
悠堕学園？　変人専門の学校？　悠々と堕落しろ、そういうことですか。
カラーで鮮やかに印刷された悠堕学園のパンフレットを、私はくしゃくしゃに握りつぶす。どうして私が、こんなわけのわからないところに行く必要がある。私は変人じゃない。友達と喧嘩したりは

するけれど、そんなの「普通」の範囲内のはずだ。
そんな私が今、悠堕学園に向かうバスに乗っているはどういうことなんだろう。
『次は悠立庭園(ゆうだてていえん)です』
短すぎるアナウンス。おかしいと思いながらも、「降ります」のボタンを押す。聞きなれた音が鳴って、それに小さく安堵する私。
なんでこんなことに。
私はバスの振動に身を任せつつ、今までの経緯を思い返した。

一学期末。お母さんが突然、引っ越すと言った。準備は私の知らないところで進んでいて、何も言い返すことができなかった。

終業式前日。クラスメートたちは私のお別れ会を開いてくれた。仲の良かった真実(まみ)ちゃんと、幼馴染の勉(つとむ)くん、涙もろい数人の女子が泣いていた。まだ数ヶ月しか一緒に過ごしていない人々に囲まれて、なんだか白々しいお別れ会は終わった。

先週。引越し。綺麗な街だと思ったけれど、自転車で１０分も走ればだだっぴろい田んぼが見えてくる、ド田舎だった。

三日前。お母さんが転校先の学校のことを説明した。ただ、「良い学校なのよ」と言って。
そして今朝。このパンフレットとバス代と荷物を渡され———プシュー。

『悠立庭園、悠立庭園です』
バスが止まった音。そして後ろのドアが開く。
ああ、着いてしまった……。

私は荷物をまとめて、この悪夢が早く終われば良いのにと思いながら立ち上がった。

プロローグ（後書き）

完全にめだかボックスに影響されて書き始めました。

でも内容はそうでもないですね、力不足なのであんなすごいのはかけません。

よってもっと低レベルな変人さんとのほのぼのモノになってます、多分。

ですが、駄目なところがありましたらご連絡下さい。

第一話　学くん

『私道です、関係者と悠堕学園（ゆうだがくえん）に用の方以外は立ち入り禁止』そんな風に書かれた、白い看板の横の、細い道を恐る恐る抜けて、そこに開けた景色を見たとき、私は思わず息をのんだ。

――それは、本当に綺麗な建物だった。

外見はテレビに出てくるような洋風の豪邸に似ている。といってもきらびやかではなく、落ち着いた感じの。

高さはざっと４階まではあるだろう。壁は真白。屋根は青で日差しを受けてキラキラと光る。窓枠は茶色で木製だろう。広い庭には大きな池まである。庭を取り囲むようにぐるりとある花壇には美しい花々が咲き誇っている。

なんて鮮やかで、なんて美しい。

ここはいったいなんだろう。

私道、と書いてあったから、ここがその地主宅だろうか。まさか学校がこんな場所なわけないだろうし。

――じゃあ道を間違えたかな。

引き返そうと、後ろへ向くと。

「……つ、勉（つとむ）くん？」

見慣れた顔。どういうわけだか幼馴染の勉くんが立っていた。勉くんは首を傾げて、

「えっと、真冬（まふゆ）ちゃんかな？　そう、真冬ちゃんか」

と言い、私が頷く前に一人でうんうんと頷いて――いや待て。勉くんはこんな喋り方しない。

だとすると。
「わかったかな？　わかったね。ご察しの通り、僕は学（まなぶ）だよ。」
勉くんの、お兄ちゃんだった。

勉くんちは、三兄弟だ。
長男・学、次男・勉、三男・強。学業ばかりの三兄弟。
勉くんは私の知る通りとても真面目な優等生、弟、強くんは運動の方が得意で、野球を頑張っていると聞いた。そして兄、学くんは、『賢いの域を超えた』とか、『知識欲の塊』とかと言われるような、そういう人だという。
きちんと会わなくなって大分経つな、としみじみ思う。噂しか聞いていないなんて。

「11年ぶりかな？　11年ぶりだね。そうか、君に最後にあったのは、まだ君が4歳の頃か。そして僕が6歳の時だね」
「えっ、そうでしたっけ？」
「そうだよ。君は覚えていないかもしれないけどね。何しろ幼稚園児だ。僕でもあるまいしね」
「いえ、そうじゃなくて。今までも時々会っていませんでしたか？　勉くんち、よく行きますし、何回かは……」
そんなことじゃなく、何故ここに居るのかを問えよ、私。
「いいや、会っていないよ。君が大体いつ来るか、それぐらい把握しているけど、僕の行動から考えて出会えるようなことはない」
把握されていた。そして、『それぐらい』と。これが賢いの域を超えた、ということか。
「そもそも、僕は小学生の頃は閉館まで図書館にいたし、中学から

はここの寮へ入っているから、お盆と正月と家族の誕生日にしか家に帰っていないしね」
「寮……？」
「何に首を傾げているのかな？　ああ、まだ言っていなかったのか。僕はこの悠堕学園高等部の生徒だよ」
そういって、背後の建物を指差した。

――コレが悠堕学園。
――学くんがココの生徒。
どうしよう、眩暈がしてきた。

第三話　校長先生

「じゃあついておいで。校長室へ案内しよう」
私の話を聞くと、学くんはふむふむ言ってから、こう言った。

入り口の重そうな扉を抜け、私は学くんと廊下を歩いていた（扉は本当に『重そう』だっただけであって、本当は自動ドアだった）。床はピカピカ、スリッパはブカブカ。まだ私の上履きが届いていないそうで、来客用のスリッパを履く羽目になっていたのである。
「それにしてもスリッパが合わないね？　Ｌを取ってきてしまったのかな」
「……私の足が小さいんです」
「おや、いくつだい？　さすがにこれは僕も知らないな」
「２０?、です」
「……」
無言にならないでください。コンプレックスなんですから。
仕方ないので別のことを考える。
……そうだ、寮があるだなんて聞いていない。中学生も入れるということも聞いていない。義務教育をこんなところで迎えていいのかと思う。
変わりもの専門学校なんて。外見に騙されるものか。

「ついたよ」
またも重そうな扉。どうせまた自動ドアだろうと思ったら、今度は指紋認証と虹彩認証の二重ドアだった。
「僕はこれでも優等生なんだ。」
学くんが神妙に、呟いた。
なにやら奥の方でごそごそ音がして、しばらくすると、若くて綺麗

な女の人が出てきた。パリッとしたパンツスーツを着こなす、気の強そうな感じの美人。肌は色白で、明るい茶色の髪は右肩の辺りでひとまとめにしてある。
この人は秘書さんだろうか。いや、学校長に秘書なんている？　でも若いし美人だし。

「美人は関係ないよ？」

その人は不敵な笑みを浮かべて、尋ねるように言う。
……今、私の心読みました？
「でも嬉しい言葉だね。気が強いとは思ったことがないんだが……まあ、良い意味として受け取っておこうか。さて、私がここの校長である――悠立（ゆうだて）心（こころ）だよ。」
予想と違って、女っぽくない言葉遣いをする人。この人が、校長、か。この年でこれはかなりのやり手なのだろうか。いや、待て。
「悠立……もしかして」
『悠立庭園』というバスのアナウンス、『私道です』の看板が脳裏に甦ってきた。悠立と名のついた場所。悠の字のつく学園。ああ、これはこの人の所有物なのか。だからこの年で。

「そのとおりだよ。正確には悠立『一族』の所有物なんだけれどね。いやあ、綺麗だったろう。あの道も、この建物もさ。素晴らしい清掃員がいるんだよ、私の元には」
当たっていた。そしてまたも心を読まれてしまった。どこまで読まれるんだろう、隠したい秘密なんて山ほどあるんだけど……。
「大丈夫、大丈夫。さすがに人の思い出を漁るようなことはできないよ。その瞬間（とき）に思っている言葉が、実際の言葉と同じように聞こえてくる、って感じかな」
「……心を読めることは認めるんですね」
私が小さく呟くとそれも悠立先生はキャッチして、

「ああ、もちろん。でも安心していい。この学校に心が読めるような人は私しかいないから。心理学を学んでるのは何人かいるけど、心が読める訳じゃないからね」
と返す。
……いや、安心できねーよ。

「僕も心理学を学んでるんだよ」
さっきから無言だった学くんが、するりと会話に混じってきた。
まあ学くんは全方位に興味を持っていておかしくない。でも、こんなんじゃ私のプライバシーは……。

「さてさて、本題に戻ろう。君はここまでの会話から察するに、転入生の斉藤真冬ちゃんだね」
なんでこんなところに来たのかわからないけれど――そう強く思いつつ頷く。先生に伝わるように。しかし悠立先生は私の思いは無視して、棚に置いてある赤い大きな箱を指差した。
「ここに上履きと勉強道具、制服などなど、ここで過ごすに必要なものがそろっている。これから開けていき、制服なんかを身に着けてもらう」
そう言って、悠立先生は箱を取りにいく。それなりに重そうなのに、ひょいと抱え上げて、私の前の机に無造作に置く。その時の音からして、やっぱり重い。驚いて学くんを見ると、普通の表情でそれを眺めている。
これが普通なのか……。

そう思っていると、悠立先生も学くんの方を向いた。
「じゃあ君は外で待機、いや、戻って構わないよ、別の人を呼ぶ。レディーのお着替えだからね」
「え……ああ、そうですね、では」
学くんが不服そうなのは、出ろと言われたことじゃなく、別の人

を呼ぶというところだろう。さっきさりげなく優等生アピールしてたし。
ちなみに私は可愛くもなければ、平・平・平というどうしようもない体つきなので私の着替えがみたいとかそんな人は皆無に等しいハズだ。私に魅力を感じるのは、よっぽどの変人くらい。
……いや待て、ここ変人学校じゃん。
私が初めて自分の身体に危機を覚えた時。
「失礼しました」
学くんはそう言って、この部屋を出て行った。
パニックになっていた私としては、それはせめてもの救いが消えてしまった状況だった。

第三話　校長先生（後書き）

コメを頂きました。
嬉しいです！エネルギーにして頑張ります！

第三話　決意

学くんが出て行った部屋は、急に静かになった。

「君はここに来たくなかったんだろう？」

悠立先生が問う。その声は、決して小さくはなかったけれど、とても静かなものだった。さっきまでと違う雰囲気。クラスメートにも、こんな風に声の調子を変える人がいた。楽しげな声と、深刻な声、そして誰かをけなす時の声。私はそんな場面に出くわすたびに、戸惑っていた。

「質問に答えてくれないか？」

「……来たくありませんでした」

失礼なセリフなのは重々承知の上だけれど、これ以外の答えは嘘になる。

「どうしてだい？」

「私は、変人ではないからです。友達とも仲良くできてたし、普通に生活してたから。なのに」

「確かに君は特殊な例だけれどね」

私の言葉を遮って、悠立先生は言う。『特殊な例』なんて、私には到底似合わない単語。

「君は普通に暮らしていただろう。他人との多少の差異があったとしても、

普通の範囲だと、思っていたね。それは間違いじゃないかもしれない」

「ならどうして」

一息の間。

「それは君が今まで普通の環境で育ってきたからに過ぎないんだよ。君の深い深い所は、違う」
「……深い、所」
深い所は違う。どういう意味かよくわからなかった。心当たりもない。今までの生活に疑問を抱いたことも、反感を覚えたこともない。『普通』に心から安堵する、普通の女子。
「普通の子は、そうそう普通に安堵しないけどね……。さ、これ以上は話せない。次へ進もう」
急に声のトーンを戻して、悠立先生は赤い箱をいじり始める。

深い所。
言い換えるなら、本能？　無意識？　心の奥底。
胸の辺りに手を置いてみる。相変わらず小さい胸。この奥に、私の中にあるモノ。
それが違う？

これは夢？　それとも誰かの嘘？　結局あやふやなままじゃないか。あまりにもリアリティのないこの学校（せかい）で、私はどうすればいい。
「ああ、一つだけ言っておく。ここで過ごすか決めるのは君だ。そういうと君はここからすぐ出て行きたいだろうけどね、ここに居れば、君の『深い深い所』が何かは掴めると思うよ」

この時、私は決意した。
ここで過ごしてみようと。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2626j/

悠堕学園

2010年10月11日11時04分発行